

赦すこと、赦されること

ティム・ジャクソン

最近、心穏やかでない手紙を受け取りました。手紙の主はこう語っています。「家族に復讐するために悪巧みをするよう、サタンが私を扇動して止みません。私は両親からひどい心的虐待を受けて育ちました。それは、結婚して家を出るまで続きました。私は、両親の憎しみや嫉妬といった否定的な感情のはけ口にされていたので、何をしても非難されました。暖かい言葉をかけてもらったことは一度もありません。両親に復讐している悪夢を見て飛び起きることが、今でもあります。もし、私が良いクリスチャンなら、両親のことはすっかり赦して、過去のひどい傷の痛みを思い出さないのではないのでしょうか。どうすれば、彼らを赦しきって、この煮えたぎる怒りから完全に自由になれるのでしょうか。どうか、教えてください。」

この手紙を書いた方のように、赦しきれなくて苦しむ人は、少なくはありません。私の知人は、不倫をした妻を赦せなくて苦しんでいます。彼は夫婦の関係を修復したいと願っていますが、再び裏切られるかもしれないという不信や恐れ、そして怒りの感情がそれを阻んでいます。

「であれ、無条件に水に流してあげます。」と恩赦を与えることだと思われています。

ところが、そのような赦しは、多くの人が考えているような肯定的な結果を生んでいません。例えば、酒に溺れて暴力をふるったり浮気をしたりという夫を、妻は黙って赦し続けなければならないのでしょうか。この種の愛や赦しが、この夫の真の必要でしょうか。神聖な結婚の誓いを破ったという恥さらしな事実と向き合うことなく、ただ赦されるということが、彼の益になるのでしょうか。

聖書は、赦すべきか否かという問いにどう答えているのでしょうか。その答えは、キリストを模範とする愛とはどういうものなのかという疑問と無縁ではありません。また、時と場合によっても違います。愛があるなら「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34) と言わなければならない時があります。何度も赦さなければならない時もあります(マタイ 18:21-22)。しかし、愛があるなら、相手のためにとりあえずは赦さないと決断すべき時もあります。

赦すこと、赦されること

2005年8月10日 第1刷発行

2013年11月10日 PDF版

翻訳： 田井淳子

発行者： 田井淳子

発行所： 日本アールビーシーミニストリーズ
〒630-0291 奈良県生駒郵便局私書箱46号

TEL：0743-75-8230 FAX：0743-75-8299

EMAIL：japan@rbc.org

WEBSITE：http://japanese-odb.org/

聖書箇所は新改訳聖書より引用

原作 “When Forgiveness Seems Impossible”

©2005 RBC Ministries, Grand Rapids, Michigan

転載・転記には、許可が必要です。

冊子は非売品です。RBC ミニストリーズは、特定の教会や教団にではなく読者のみなさまの献金によって支えられ、人生を変える聖書の英知を伝えています。

目次

赦しの定義	6
赦しの模範型	7
赦しの代価	22
赦し合う人生の必須条件	23
赦しに関する誤解	29
ケーススタディ（創世記 37 ～ 50 章）.....	34
たとえ話（ルカの福音書 15 章 11 ～ 31 節）.....	37
赦す愛の逆説的真理	41

赦しの定義

聖書を貫く赦しの概念は、「解き放つ」、「送り出す」、「行かせる」などというものです。聖書の中で「赦し」と訳されているギリシャ語は、役職を解かれるとか、結婚関係から解かれる、また義務や負債、刑罰を免除されるというときの言葉と同じです。何らかの借りがあるという状況と「赦し」のコンセプトは関連しています。聖書的に言えば、赦しとは、「愛を込めて自発的に借金を棒引きにしてあげること」です。イエスは、パリサイ人シモンの家で、そのように教えられました（ルカ 7:36-47）。

その時の様子は、以下のようでした。イエスが食卓にいと、心砕かれて悔い改めた娼婦がやって来ました。その女性は感情をこらえ切れないかのように、イエスへの深い敬愛を包み隠さず表しました。彼女は、「泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけて、香油を塗った」（38 節）のです。シモンは腹を立てて、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」と思いました（39 節）。

その後の展開は、次のとおりです。「するとイエスは、彼に向かって、『シモン。あなたに言いたいことがあります。』と言われた。シモンは、『先生。お話しください。』と言った。『ある金貸しから、

ふたりの者が金を借りていた。ひとは五百デナリ、ほかのひとは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。』シモンが、『よけいに赦してもらったほうだと思います。』と答えると、イエスは、『あなたの判断は当たっています。』と言われた。」(40-43 節)

罪は負債を負わせます。この負債は、勘弁してもらわなければなりません。勘弁してもらった負債が、どれほど大きいものかを認識すればするほど、赦してくれた人に対する敬愛が深まります。

赦しの模範型

イエスは、ルカの福音書 17 章 3～4 節で、「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」と語られ、自分に罪を犯した人を赦すときの模範を型にして弟子たちに教えられました。

この型には5つの構成要素があります。それをひとつずつ見ていくことにしましょう。

構成要素①：罪

イエスは、どのような罪に対応すべきだと教えておられるでしょ

うか。この個所では特定されてはいませんが、罪は愛の欠如だと定義されるべきでしょう。イエスは、私たちの神と人に対する義務は、愛することだと教えられました（マタイ 22:37-40）。パウロ



も「だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。…」（ローマ 8:13）と語り、同じことを教えています。

しかし、ルカ 17 章 3～4 節が語る罪をすべての愛の欠如であるとするならば、疑問が生じてきます。イエスは、私たちが愛に欠ける態度や行いをしたときは必ず、互いに戒め合いなさいと言われているのでしょうか。または、愛を裏切った人には何らかの処分をすべきであり、さもなければ、人間関係を損ない、加害者から悔い改めの機会を奪うことになると言われているのでしょうか。

クリスチャンは忍耐強く愛するべきなので、上記で「罪」と呼ばれているものは深刻なものに限られ、普通のことは見逃すべきだと考えているならば要注意です。自分では大したことではないと思っている「罪」が、実は考えている以上に深刻だという場合があるからです。私たちはどこまでも自己弁護する生き物です。日常的な「罪」が、どれほど大きな影響を自分自身や自分を取り巻く人間関係に及ぼしているかに関して、過小に評価する傾向があります。

一方、被害の否認は、自己欺瞞の典型です。受けた打撃を直視せず、過剰反応しているだけだと自分に言い聞かせるなら、その人間関係に生じた小さな亀裂は徐々に広がって、ふたりは、表面的で疎遠な間柄になっていきます。そして、「まあ、人間は変わるのだから」と言い逃れをして、正直に互いと向き合うという愛を実践して赦し赦されるという貴重な体験に背を向けます。

人間は、互いに親密さを深め信頼し合うようにと造られましたが、罪はそのあり方を蝕みつづけています。ですから、赦しは、常に必要な罪の対処法です。私たちは、赦すだけでなく赦されなくてはなりません。

構成要素②：対決

被害者が、まず行動を起こさなくてはなりません。イエスは、「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。」(ルカ 17:3) と語られました。「戒める」とは厳しい言葉です。しかし、イエスの訓戒の基本は、いかなる行動の動機も、神の愛に倣って相手を愛するということです。ですから、この場合、加害者である相手の最善は、戒められることであるはずです。日本語で「戒める」と訳されているギリシャ語の単語には、「尊敬する」とか「重々しく扱う」という意味もあります。このことから、間違いの責任を取らせるという行為は、その人を敬う行為であると考えられていたことが分かります。つまり、その人のことを大いに尊重するなら、そ

の人の正しくない言動を深刻に捉えなさい、ということなのです。

まず「キリストの愛に倣うには何をすべきか」ということを考え



みましょう。イエスのように、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34、参照：使徒 7:60) と祈るのがふさわしいときもあります。この

ような愛は、「多くの罪をおおう」(第一ペテロ 4:8) もので、加害者の理解を超えたものです。特に、子どもや信仰の浅い人、またキリストを知らない人には理解できません。

しかし、一番大切なことは「キリストの愛に倣うには何をすべきか」との問いかけです。なぜ罪を糾弾しないのかと寛容の動機を問いかけてみたら、気まずくなるのはイヤなので対決姿勢を避けたということであってはいけません。加害者にとっての最善を求めたから、という動機でなくてはなりません。

キリストの愛に倣うには何をすべきか

愛の込もった対決姿勢には、優しい雰囲気があります。多くの場合、「私には分かっていますよ」という態度でじっと見つめたり、「やめておきなさい」というメッセージを込めて、その人の肩にそっと手を触れたりという行為で十分です。しかし、時には

なことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわかずかです。いや、一つだけです。…」(ルカ 10 : 41-42) という主のみことばから、イエスの優しい思いやりを察しない人はいません。

愛を込めて糾弾することの必要性は明らかです。問題を未解決のままにしておくなら、その人との関係は何となくよそよそしく冷えたものになっていきます。信頼関係が壊れると、お互いを恐れたり避けたりするようになります。また、加害行為に目をつむって、その人を無罪放免にするなら、それは、その人が同じ間違いを繰り返すのに手を貸していることです。例えば、盗みや万引き、うそや噂話、約束破り、性的不道徳などがこれにあたります。このような癖のある人は、誰かが厳しい愛ではっきり言わなければ、いつまでも変わりません。

態度が厳しいか優しいかは別にして、対決には細心の注意が必要です。「愛を込めて」というなら、決して安易な気持ちではいけません。また、性急であってもいけません。「身の程を思い知らせてやる」と喜び勇んで相手を叱りつける人もいますが、イエスはそのような態度を支持されません。思いやり深い「対決」とは、慎重に時を見計らって、その人の必要にぴったり合わせて実行されるものです。賢明な人なら、相手を卑しめず、むしろ立て上げるために、愛によって正しく語るができるはずです(エペソ 4:29)。

間関係を修復するというではありません。キリストに倣って愛を実行することなのです。

対決の結果が必ずしも和解ではないので、私たちは躊躇します。しかし、キリストに従いたいのであれば、実行しかありません。イエスは「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に『根こそぎ海の中にうわれ。』といえ、言いつけどおりになるのです。」(ルカ 17:6) と言われました。つまり、信仰は小さくても、それに基づいて行動すれば、神が私たちを従順の道に導いてくださると確約されているのです。このからし種



のたとえ話は、弟子たちが神の戒めと赦しについての話に驚愕して「私たちの信仰を増してください。」(ルカ 17:5) と言ったときに語られ

ました。そしてイエスは、神の僕(しもべ)の役割とは、命じられたことをすることだと続けられました(ルカ 17:7-10)。

このイエスのみことばをどう理解するかは、私たちが信仰というものをどう思っているかにかかっています。キリストのように天の父である神を信じることは、私たちが自分に都合の良い考え方にしがみつくといいことではありません。神が聖書で語られていることを信じるということです。もし、しっかりと根をはった木が根こそぎ移動することを神が望まれるなら、私たちの側に必要なもの

はごく微量の信仰です。神の御力が、その奇跡を成すのです。

しかし、ルカ 17 章 1 ～ 10 節は、神の御力が私たちの背後で働いて加害者との問題を解消してくださると語っているのではありません。むしろ、加害者と対決し、そして赦すという、非常に困難なプロセスに立ち向かう私たちを支えて、私たちの成すべき仕事を完結させてくださると語っているのです。しかし、性急になってはいけません。加害者と対決し、そして赦すという仕事に必要な力を、神がお与えくださるという指摘は大変重要ですが、赦しの必須条件が悔い改めだとイエスが語っておられることは、それと同じくらい重要です。

構成要素③：悔い改め

イエスは、無条件に赦しなさい、と教えられたのではありません。ルカ 17 章 3 ～ 4 節では「…もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」と語られました。

「悔い改める」とは、「考えを変える」ということです。「悔い改め」そのものは、罪を克服することを意味しません。むしろ、罪につながった生き方が本当に変わるために、今までの心得違いを改めることを意味します。そのような「悔い改め」は、キリストが提

示されている「赦し」の必須項目です。罪を犯した人はまず、自分の愛の欠如を認める場に引き出されなければならないと、イエスは語っておられます。

「覆水盆に返らず」ということわざは事実かもしれませんが、容器をひっくり返して水をこぼした人は、少なくとも、その水を拭いて謝罪することができるはずで、自分の間違いを認めて、心から後悔していると行動で証明することはできるはずで、もし、私たちが誰かに対して罪を犯したなら、自分の否を認めてできるかぎりの賠償をすべきです。申し訳ないことをしたとこちらが認めるなら、相手の心が少しは慰められるでしょう。

「悔い改め」が真摯であるのか否か疑わしいこともありますが、その時は、証拠を見つけるようにしましょう。自分の非を本当に悔いているなら、その人は自分が間違っていたと言葉にすることをはばかりません。言い訳をせずに謙って赦しを請います。そして、自分の罪が招いた結果を受け入れます。ダビデ王は、神のみこころを追い求める人として知られていますが、彼が罪を犯したときの態度はこのようなものでした。ダビデは、神に赦されましたが、その罪が招いた結果とは、息子の死、家庭の崩壊、そして内乱という恐ろしい悲劇でした（第二サムエル 12:13-23）。しかし、ダビデはそれを受け入れたのです。

「悔い改め」が不可能なこともあります。例えば、加害者がすでに死亡している場合です。そのような場合、祈りとあわれみの

心でその人を神の御手に委ねることしか、私たちにできることはありません。

構成要素④：赦し

前述の「赦しの定義」を思い出してください。それは、愛を込めて自発的に借金を棒引きにしてあげることでした。正直に向き合い、愛し合い、ともに成長するという人間関係を育もうとするなら、それに伴って生じる障害は、赦し合うことで乗り越えていきます。互いを避けたり、よそよそしくしたり、冷たくしなければならぬ理由は皆無のはずです。

「私を傷つけた」という事実に対して、正しい処置がなされたなら、寛容な人は「あなたが私を傷つけたことを認めて恥じていることが、私にはよく分かりす。ですから、もうこのことは、水に流しましょう。」とすることができます。一方で、真摯な悔い改めの証拠が言動に表れないなら、愛を込めて赦さない選択が必要となるでしょう。

愛しているからこそ赦さないことを表現する形は色々あるでしょう。教会で聖餐を控えさせることかもしれません。夫婦間に溝があるなら、うまくいっているかのように振舞うことを止めたほうがよいのかもしれません。物静かな態度でもはっきり絶交するなどして「あなたの行為は私の信頼を裏切ったものです」と友人に悟らせることかもしれません。職場では、失敗を謝罪しなければ、昇進や昇給の差し止めにつながることもあります。

赦さないといって非難されることがよくあります。もし、加害者の悔い改めが証明されているのに、被害者が赦さないならば、それは間違っています。しかし、悔い改めがはっきりしないなら、



問題の焦点は未だ自分の非を認めないその人です。同時に、キリストの教えに従って率直かつ穏便に「対決」していない

のに、相手が悔い改めないから赦さないと被害者がいうなら、それも正しくありません。ふたりの人間関係を壊してしまうほどの大きな問題があると伝えるのは難しいことです。それを、キリストの愛を見習ってあえてしたのに、相手が応答しないなら、赦さないのが正しいのです。

仮に罪は赦されても、犯した悪い行為の結末から逃れることはできません。盗みや万引き、酒乱や薬物の乱用、幼児虐待をしたけれども悔い改めたという人たちに対する愛とは、この人たちが再び罪を犯さないように監視したり、行動を規制したりすることを意味します。神は私たちが赦してくださいましたが、蒔いた種を刈り取るという自然律がなくなるわけではありません。パウロはガラテヤ人の手紙に「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り

私は、妻の心を傷つけたある春の日曜日のことを、今でもはっきりと思い出すことができます。私は当時、大学院生で、卒業論文を書いていました。一方で、生活のためのアルバイトも忙しく、論文の提出期限が迫っているのに、数週間も残業が続いていました。それで、その日曜日は教会の礼拝を休み、論文を書こうと思ったのです。

ところが、それは母の日礼拝でした。私たちは、その年、結婚8年目にしてやっと子どもを授かったので、その礼拝は彼女にとってのビッグイベントでした。教会では、母である女性たちが立ち上がって、敬意の印として一輪の花をもらいました。しかし、私はその場において妻に敬意を表すことはできませんでした。論文のことで切迫していたからです。

私は帰宅した妻の顔を、生涯忘れることはないでしょう。悲しみと怒りと恥の入り混じったあの涙目を決して忘れません。彼女は、その花をちぎってゴミ箱に捨ててしまいました。私はショックで言葉を失いました。私は彼女を傷つけたのです。悪気はなかったのですが、彼女の心の必要に鈍感だったのです。生涯で最初の母の日は、二度とやって来ません。それを逃してしまいました。「覆水盆に返らず」です。

私は、心から妻にあやまりました。私の選択が間違っていたことは明らかです。弁解の余地はありませんでした。私たちは、話し合い、抱き合い、ともに涙しました。論文のことなど、もうどうでもよいように感じました。妻は私を赦してくれ、私たちは再び

仲の良い夫婦になりました。

もし、人間関係の回復を体験するなら、悔い改めてみもとに
来た人を神がどれほどお喜びになるか、ある程度理解できるかも
しれません。結局のところ、神は赦したいのです。罪を決して見
逃されないのと同じように、神は心から赦したいと願っておられる
のです。



そのような神の愛を、ネヘ
ミヤは、次のように言い表し
ました。「彼らは聞き従うこと
を拒み、あなたが彼らの間で
行なわれた奇しいみわざを記

憶もせず、かえってうなじをこわくし、ひとりのかしらを立ててエジ
プトでの奴隷の身に戻ろうとしました。それにもかかわらず、あな
たは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、
恵み豊かであられるので、彼らをお捨てになりませんでした。」(ネ
ヘミヤ 9:17)

福音のメッセージは、和解を導く赦しについてです。神と人との
壊れた関係を回復し、和解することです。過去には、神を離れ、
神に逆らって生きていた私たちが、神との回復された関係をエン
ジョイするために神の近くに引き寄せられたのです (ローマ 5:8-
11、コロサイ 2:12-19)。

赦しの代価

赦し赦される過程では、被害者と加害者の双方とも、高い代価を支払わなければなりません。その顕著な例は、神がどれほどの代価を払って私たちを赦してくださったかということです。私たちの罪の罰を、御子が受けてくださいました。「…正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです…」(第一ペテロ 3:18)と語られているとおりです。

被害者にとって代価とは、復讐したいという思いを葬り去ることです(ローマ 12:17-21)。過去を水に流して、悔い改めた加害者の再生を求めることです。

加害者にとって代価とは、恥を忍んで非を認め、改心することです。自分のしたことを隠さずにありのまま告白して、百パーセントの責任が自分にあると認めることです。自分の過ちに端を発する結末を受け入れて弁済のできることはし、逃げたり隠れたり弁解したりしないことです。そして、平身低頭に相手の寛大な処置を請い願い、それがかなったなら心から感謝することです。

被害者と加害者の双方にとって、赦しの代価は決して安くありません。しかし、ふたりの人間関係が回復され、新たに出発できるという解放感や喜びを考慮すれば、それを支払う価値は十分にあるはずです。

赦し合う人生の必須条件

どうすれば、「赦し赦されること」が人生の営みの一部になるのでしょうか。聖書的な寛容を追求する歩みの準備段階として、以下の提案をしたいと思います。

現在進行形で生涯つづく行為だと認識する。

「赦し」は一度きりの行為ではありません。私たちを裏切る人の「負債」を何度も免除してあげることです。ルカの福音書の17章を思い出してください。イエスは、もし兄弟が1日に7回罪を犯して7回とも悔い改めれば、その人を赦さなければならないと教えられました。このメッセージは1日の限度が7回だと教えている、と捉える人があるかもしれませんが、それは違います。むしろイエスは、赦しには限度がないと教えておられるのです。ペテロが「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」と尋ねたとき、イエスは「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います…」(マタイ18:21-22)と言われました。「赦し」は、生涯つづくのです。

自分が加害者の場合、赦されることを強要してはならない。

赦しを請うときに注意しなくてはならないことがあります。大切な問題は、赦しを請うときの言葉使いではなく、その動機です。残念なことです。多くの場合、謝罪の言葉を口にするのは一種の逃げです。自分が悪いことをしたという事実としっかり向き合うのが辛いので「ごめんなさい」と言うのです。薄いベールで覆われたその本心が暴露されるのは、大抵の場合、すぐには赦されないと分かったときです。もし、謝罪をしている方が居直って、相手がすぐに赦さないことを非難したならば、その謝罪が真心から出たものでないことは明白です。本当に悔い改めているならば、自分には赦される権利があると主張したりしないはず。本当に悔いた心は、砕かれたたましい（詩篇 51:17）です。

将来に備えて、聖書的で正しく赦せる心を育てよう。

1. 短期的な満足に心を奪われない。

言い返したり仕返しをしたりして勝ったとしても、一時的な満足しか得られません。イエスは、山上の垂訓で「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」(マタイ5:6)と語られ、時が来れば永続的に満ち足りるものを渴望しなさいと教えられました。

7:10) が、悔い改めを生じさせると述べています。私たちには、神のみこころに添って自分の罪を心から悲しみ、神の赦しを確信して、神のあわれみ深さを味わい知った体験があります。自分の体験の深さに応じて、罪を犯した人に悔い改めを奨励し、神のあわれみによって解放されるようにと勧めることができます。

3. 復讐という考えを拒絶する。

極悪非道な振る舞いをした人、例えば、幼児虐待をした親、わいせつ行為をした教師、不倫をした配偶者、子どもを殺した飲酒運転のひき逃げ犯などの未来を決定する権利が、あなたに与えられたとします。ひとつは、永遠に痛めつけられ苦しめられるという未来、もうひとつは、あなたにも良くしてくださった神の御前で悔い改め、改心するという未来です。どちらの未来をあなたは選びますか。その選択は、あなたの心の方向性を物語っています。

復讐したいというのが自然です。優しくされる資格がない人に優しくするのは不自然です。しかし、神の恩寵から遠ざかろうとする人は、恨み、罪悪感、激怒、恐れ、疎外感、孤独といった感情を行ったり来たりしながら生きていきます。赦すことを拒みつつける心には毒があります。その毒で苦しめられるのは、罪を犯した人だけではありません。心に毒を持っている人もまた、痛みつつけるのです。

復讐心を神の御手に預けるということは、決して正義をないがしろにすることではありません。神に正当な言い分を申し上げて

審判を委ねることは、「別に気にしていないので、大丈夫ですよ。」と相手に言うことではありません。そうではなくて「神が御心のときに御心のことをあなたになさるでしょう。私はそれを信じていますから、自分で復讐しようとは思いません。」ということです。

悪に悪で報いることを放棄するなら、相手は仕返しをされると覚悟していたので、不意を突かれるでしょう。私たちは、予想に反した寛容な態度で相手をびっくりさせて、改心して赦しを請うべきだと方向転換するきっかけを作るべきです。私たちは神に赦されているのですから、そうすべきです。

罰するのは神の役目です。神は「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」(ローマ 12:19)とおっしゃるお方ですから、私たちが挑むべき難問は、神があわれみ深くお取り扱いくださるようと相手のために祈れるかどうかです。

4. 神が私たちが愛してくださったように、他人を愛そうとする熱意を持つ。

自分が受けた神の赦しを相手も受けるようにと願って、その人を愛そうと努めているなら、その行為は神を親しく知っているという確かな証拠です。神の寛容さと親切の恩恵を限りなく受けているという認識が、他人を赦し愛する最大の動機になります。

イエスの教えは単純明快です。多く赦された人は多く愛します(ルカ 7:40-48)。一方、多額の負債を免除されたあとで「小銭」の弁済を迫る人は、厳しい罰を受けます(マタイ 18:23-35)。

赦しに関する誤解

1. 深刻さを過少評価する。

起きてしまったことは変えられないという無力な立場に置かれたとき、私たちは自らを欺いて、何もなかったふりをしたり、大したことではないとか、思うほどひどくはないと言ったりしがちです。赦すとか、赦さないとかいうような大事ではないとうそぶくのです。

父親から習慣的な虐待を受けて育った女性のカウンセリングをしました。ところが、子どもの頃の話を話してくださいというと、彼女は「ごく普通の子ども時代でした。良い思い出です。家族で旅行に行ったりしました。ごく普通でした。」と言ったのです。その記憶のために、夜は40年間も悪夢にうなされ、男性を恐れるあまり、異性とまともな人間関係がまったく築けないという虐待の体験を彼女が語り出したのは、第一回目の面接から数ヶ月もたってからでした。

彼女は、成長過程での深刻な体験を過少に評価しようとしていましたが、その行為は、おぞましい過去と向き合う心の育成を妨げていました。けれども、それがどれほど自分をダメにしているかという真実を直視しはじめたとき、固まっていた何かが溶けていくようでした。彼女はやっと、人としての健やかさや、女性としての美しさに向かって歩み出すスタートラインに立ったのです。

深刻さを過少に評価する発言は色々あります。例えば、「叔父さんは、ああいう人なのよ。別に悪気はないの。赦すとかどう

とかいう問題ではないわ。ただ、ありのままを受け入れてあげればいいのよ。」と言ったり、「そんなに深刻に受け取らなくてもいいでしょ。本当にあなたは生真面目なんだから。」とか「人にそんなに期待してはダメよ。」などと言ったりすることです。

このように深刻さを過少に評価してしまうと、「赦し」は非常に深刻な状況にだけ必要な救命道具で、日常的なものではないという考え方になってしまいます。

一方で、極端な反対意見もあります。つまり、本当に些細なことにも白黒をつけなくては我慢できないという人です。このような考え方もまた、「赦し」に対する健全な理解の障害になります。

迷惑をかけられたり傷つけられたりしたときに、はっきり白黒をつけるべきか、黙っておくべきか、その決断は簡単ではありません。上記のような非建設的な両極端を避けて、正しい判断ができるように努力しなければなりません。自分を守ることばかり考えているなら、どちらかの極端に走りやすいと言えるでしょう。

2. 赦すことと忘れること。

多くの人は、エレミヤ書 31 章 34 節「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」を引用して、赦すことは忘れることだ、と言います。この人たちは、神の赦しとは、神が私たちの罪の過去をご自分の記憶から消してしまわれたことを意味するのだと言います。そして、私たちもお互いをそのように赦さなければならない。神が私たちの罪を忘れてくださったのだから、本当に赦すというなら、私たちも傷つけられた過去を忘れ

てしまわなければならない、と言います。

しかし、神は罪を赦したからといって、それを忘れてしまわれたわけではありません。神は、太古の昔から永遠の未来に渡って、すべてのことをご存知で、すべてのことを覚えておられるお方です。聖書は神の靈感によって書かれた書物ですから、神は聖書の筆者ではありますが、「赦した」と言われているダビデ王の罪を記憶に留めておられ、それを記述しておられます。同じことが、アダム、アブラハム、モーセ、パウロ、ペテロなどに関して当てはまります。

神があわれみ深いというのは、そむきの罪を赦して忘れてしまわれるからではなく、そむきの罪を赦した後はその人を敵と見なされないからです。詩篇の作者の「どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めず、御憐れみを速やかに差し向けてください。わたしたちは弱り果てました。」（詩 79:8 新共同訳）という願いは、まさにこのことです。

神は、ダビデが姦夫であったことを覚えておられました。ラハブが売春婦であったこと、モーセが殺人者であったこと、アブラハムがひどい嘘をついたこと、パウロがクリスチャンを迫害し、ペテロが敬虔どころかサタンの回し者のようなことを言ったり、主イエスを否んだりしたことを覚えておられます。神はこの人たちの罪を記録として残されました。しかし、彼らを恥かしめるためにはありません。ご自身が愛し、赦し、更生させて、お用いになった人々の真の姿を私たちに伝えるために、彼らのありのままを記

述されたのです。

「赦すことは忘れること」というアプローチは、間違った考えを頼りに、過去の痛みから逃避する試みに過ぎません。神は「忘れなさい」とは教えておられません。過去のことが原因でお互いを敵視することのないようにと言っておられるのです。神の姿に倣い、聖霊に助けをいただいで、傷つけられたときのことが忘れられなくても、相手の人を愛情深く赦すことができます。

3. 自分のために赦す。

このアプローチは、「自分を第一に愛しなさい」という考えから派生しています。カウンセラーのロビン・カサージャンは、クリスチャンではありませんが、「安らかな心のための勇敢な選択」という著書を記して、昔の恨みや怒りから解放される方法として「赦し」を提案しています。

さて、彼女は「赦し」をどう定義しているのでしょうか。インタビューに応じて、カサージャンはこう述べました。「一般的に赦しについて考える場合、自分以外の誰かに効能があると思われています…見逃されている点は、赦すことは、本当は自分中心の行為だということです。それは自分にとってよいことです。というのは、自分の感情を他人の行為の犠牲になることから解放して、益々心安らかに生活する自由を手に入れるからです。」(ニューエイジ・ジャーナル誌 1993年9月/10月号より)

多くの人々は、当然のことながら、自分の心の平安を求めていますから、このような無条件の赦しというアプローチに惹かれます。

自分のために赦せば、激しい恨みや怒りから解放されるかもしれませんが。復讐心に燃えるということもないでしょう。キリストのように柔和な態度で自分を傷つけた人に接することができるかもしれませんが。けれども、この方法は聖書が教える本当の赦しの祝福を巧妙に損ない、弱体化させ台無しにしてしまいます。その危険とは、赦しを愛の表れから利己的な自己防衛の策にしてしまうことです。

神は無条件に私たちを赦してくださったのでしょうか。いいえ。神が私たちを赦して、救ってくださったのは、私たちの悔い改めという行為があったからです。私たちは、自分で自分を救うという考えを捨てました。そして、ご自分のいのちを犠牲にしてくださいました。生きて働きのいのちだけが、「私」を救うことができると信じました。

神の子どもとなったクリスチャンの間では、赦すことと赦されることに関して、これと同様のことが言えます。ヨハネは、「私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(第一ヨハネ 1:9) と語り、私たちが罪を犯したなら、神は私たちを無条件に解放なさらないと明言しています。

キリストのように赦すためには、相手を愛さなければなりません。しかし、キリストのように愛していると示すために、相手を赦す必要はありません。問題の解決は、無条件の赦しではなく、自分自身に「愛に必要なものは何だろう」と問いかけることです。神

を愛し、自分を傷つけた人を愛するために、大切なことは何だろうかと問いかけることです。

ケース・スタディー

(創世記 37 ~ 50 章)

ヨセフは、父親が年老いてから生まれた息子でした。兄が 10 人と弟がひとり、姉が数人いました。若い頃の人生は困難続きでした。父親が大っぴらにえこひいきをするために、兄たちから嫌われていたのです。兄たちは、ヨセフが 17 歳になったとき、彼を殺そうと相談しました。しかし、思いとどまって、干上がった水溜めの穴に放り込んでおき、商いのためにエジプトに下っていく隊商に売り飛ばしたのです。そして、父親には野獣に殺されたと報告しました。

ヨセフは、無理やりエジプトに連れていかれると、パロの宮廷を守る侍従長に買い取られました。そして、主人の妻を辱めようとしたと無実の罪を着せられ、投獄されただけでなく、そこから助け出すことができた人からも忘れられてしまいました。ヨセフが、憤りや恨みや復讐心に燃えていたとしても、当然だと言えるでしょう。

この物語で驚くことは、このような悲劇に見舞われながらも、ヨセフは 30 歳の誕生日を迎える頃、エジプトの宰相に任命されたということです。また、それ以上の驚きは、ヨセフの人生が、聖

をスパイだと非難して監禁し、ある企てをして彼らの心を苦しめました。

あるとき、ヨセフは兄たちが「われわれは弟のことで罰を受けているのだなあ。」と言い合って昔の罪を悔いているのを聞いたので、その場を離れて涙しました（創世記 42:21-24）。

過去にけじめをつけることは、簡単ではありません。ヨセフ自身も、自分の心の痛みに百パーセント向き合うことができませんでした。それで、恐れる兄たちに自らの素性を明かしながらも、彼らのおかげで被った人生の痛手を過小に評価するかのようにならないうちに「今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。」（創世記 45:5）と語りかけました。

しかし、中途半端ななぐさめは、過去の傷を癒してくれません。ですから、父親が死ぬと兄たちはヨセフが復讐するのではないかと恐れしました。そして再度、赦しを嘆願しました。ヨセフもやっと過去に完全にけじめをつけるときが来たと悟りました。そして、彼らの悪を悪と言い、「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。」（創世記 50:20）と語りました。聖書は、ヨセフが兄たちを慰め、優しくしたと伝えています。

赦しのプロセスは、とうとう完結しました。兄弟の関係が回復したのはすばらしいことでした。ヨセフは兄たちの罪を完全に認識した上で、完全に赦すことができました。彼は自分の人生の

必要や幸せの鍵が兄たちの手の中にあるのではないと分かっていたので、彼らを赦すことができました。自分の人生は、神の御手の中にあると分かっていたからです。

たとえ話

(ルカの福音書 15 章 11 ~ 31 節)

もうひとつの美しい赦しの物語は、イエスが語られた放蕩息子の話です。ここには以下のおりの証拠が見られます。

悔い改めた心。

放蕩息子は、我に返り父の家に帰ろうと決心します。彼は心から反省し悔い改めていました。悔い改めとは、心碎かれて人生の歩みの方向性を変えようとする事です。それには、次のような特徴があります。

- 人間関係の回復を渴望する。

彼は罪の生活の中で得られるもの以外を心から求めました。彼は家に帰りたと思ったのです (16 節)。

- 謙ってあやまる。

彼は「私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」と述べて、神と親の愛に背いたことを自分から認めました (18-19 節)。

- **あわれみを請う。**

彼は「あなたの子と呼ばれる資格はありません。」と言って息子の権利を返してもらおうとはせず、父のあわれみにすがって雇い人のひとりにしてもらいたいと願いました（21 節）。

- **赦す心。**

純真な悔い改めに応えて、思いがけなく寛大な赦しを与えられました。この物語の父親の姿は、神の赦しを象徴しています。それには、次のような特徴があります。

- **希望を失わずに待つ。**

この父親は、息子が悔い改めて帰宅し、もとの親子関係が回復されるという望みを決して捨てませんでした。彼は忍耐して祈り、息子の姿が地平線上に見える日を待ち望んでいました（20 節）。よい結果を待ち望む熱い思いが冷え切ってしまうことはありませんでした。

- **勇敢に愛する。**

当時の文化では、この息子は地べたにひれ伏して謝るべきでした。しかし、この父親は世の中の慣習に固執することなく、謙遜にも自分の立場を放棄して、押さえ切れない愛と喜びを余すことなく示して、走って行くと息子を抱きしめました（20 節）。

- **あわれんで赦す。**

父親は、息子の心からの改心を察したので、喜んで彼を赦し、もとどおりの息子の地位に復権させました。前代未聞の出来ごとでした。

- 悔い改めを祝う。

父は息子の帰宅を祝うために祝宴を催しました。親子関係にひびを入れ壊してしまう方向に走っていた息子が、立ち直ったので、ふたりの関係は回復され活力を取り戻しました（23-24 節）。

赦さない心。

この青年の兄（イエスのたとえ話を聴いていたパリサイ人を象徴している）は、頑固に赦さないことを選びました。この態度には、次のような特徴があります。

- かたくなである。

彼は、愚かな弟に息子の地位を回復させることは、まったく考慮の余地がないと考えていました。弟に優しい気持ちを持たないのは正当だと感じていました。あれほど傷つけられたのに、親子関係を回復したいと父が願っていると知り、激怒してしまいました（28 節）。

- 復讐に固執する。

彼の焦点は、弟のあやまちを罰することばかりに向けられていたので、彼の心の変化に目を留めることができませんでした。彼は弟に自業自得を思い知らせたかったのです。彼にはあわれむ心がなく、和解の望みもありませんでした（28 節）。

- 祝うことを高慢に拒絶する。

兄は弟とも父親とも冷たい関係になりました（28 節）。彼は、自分の気持ちばかりに気を取られていたので、喜び祝う機会を

逃してしまいました。彼は、お父さんがどれほど愛情深く、また息子を待ちわびていたかに気づきませんでした。それどころか、ひどい態度で自分だけが正当化している怒りをあらわにし、自分の正しさを誇示して、自分のしていることが父親をどれほど悲しませているか、まったく気づきませんでした。彼の行動は、弟のあやまちと同じぐらい親子関係を冷たくしてしまったのです。赦すことを拒絶するならば、それは、頑固で反抗的な心の表れです。神の井戸から赦しの水を未だ十分にいただいていない証拠です(ルカ 7:47)。

自分を傷つけた人を愛せないのは、神にどれほど愛されてきたか、まだ分かっていないということを意味しています。使徒ペテロは、第二の手紙の1章に、信仰から始まる7つの美德を掲げていますが、それは「…には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」(第二ペテロ 1:5-7)と頂点を極めていきます。そして、「これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。」(8-9 節)と述べています。

赦す愛の逆説的真理

神が示しておられる愛の概念は、私たちのものとは極めて異なっています。私たちは、自分が気に入ったので、その人を愛しますが、神は、ご自分に愛されることが私たちの最善なので愛してください。私たちは、赦すことが自分に利するので赦しますが、神は、相手にとっての最善のために赦しなさいと、私たちに教えられます。私たちは、自分を心地よくするものを受け入れて、痛みを遠ざけようとしています。しかし、神は、「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。」(ローマ 12:9)と語られます。

誰かを愛するならば、赦そうと努めなければなりません。赦すためには、愛さなければなりません。しかし、そうするためには、神との関係を深めなければならないのです。神は、私たちの周囲の人に対して親切な思いを持っておられます。神と深く交わることによって、その思いを反映する者になることなしに、神のように赦したり愛したりはできません。それができて初めて、「愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。」(第一ヨハネ 4:17)とすることができるのです。

愛する力や赦す力は、まず神に赦されて生まれるものです。その第一段階は、もう済んでいますか。自分の罪を悔い改めて

神の御子イエスを信じ、神に赦され、神と親しい間柄になるという喜ばしい体験をもうしましたか。

もしまだならば、自分の罪の負債を自分で払い切ることはできないと謙虚に認めて、神に負債を免じてもらうように赦しを請いましょう。そして、神の赦しの賜物を受け取りましょう。あなたの罪の負債は、キリストが払ってくださいました。その事実を受け入れましょう。神が招いておられます。

今日、イエスの救いを受け入れましょう。そして、神のように人を赦すことができる自由を手にしましょう。神は、キリストに免じて、あなたを赦してくださったのですから。

ティム・ジャクソン: 米国ミシガン州在住。米国RBC牧会カウンセリング部、シニア・カウンセラー。認定心理療法士。